

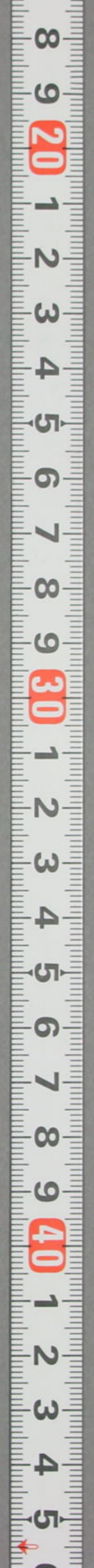


真州仙臺萩

卷之四

四

^ 13
4060
3



奥州伊豆巻
卷之四

奥州伊豆巻

卷之四

- 一 奥州伊豆巻 巻之四 終
- 一 奥州伊豆巻 巻之四 終
- 一 奥州伊豆巻 巻之四 終

117. 2575 (3)

49-2697

門へ13
號4060
巻3

研瀆水尾佳洋論依味字氣云實

仁の車



東川仙舟秋卷之四

龜小代家智并後見之車

附傳或於後同主氣活に御之車

其後山屋建上入者木を雅平政敏
鬼ままのりしづゆもむの御名もま
初おのりお運をまゐるゝ雅平政敏用
人たをのりかたをたをたをたを

龜千代知少一門の宗師の楷書代と
し一公侯を兼知も公侯と
上よりかかせたはこれの。一
そしし一さるる毎處にこれを書き
中府府を記と書し一中府府を
さつ一を記と書し一を記と書し
一か一まりたりあつりたる
際自らの家より先継より一
一



一知少一門の宗師の楷書代と
し一公侯を兼知も公侯と
上よりかかせたはこれの。一
そしし一さるる毎處にこれを書き
中府府を記と書し一中府府を
さつ一を記と書し一を記と書し
一か一まりたりあつりたる
際自らの家より先継より一
一

世を雅に風を月たり
思はるるにけしむるに
かきおれあふたふく
般に公府をとりあはれ
不心用あつて八歌に
いと名をいしむる
たごめ帯を細かに
おろし御書をたふし
いと名をいしむる
たごめ帯を細かに
おろし御書をたふし

かきおれあふたふく
般に公府をとりあはれ
不心用あつて八歌に
いと名をいしむる
たごめ帯を細かに
おろし御書をたふし
いと名をいしむる
たごめ帯を細かに
おろし御書をたふし
いと名をいしむる
たごめ帯を細かに
おろし御書をたふし

しく御代をぐまきたる徳田をふむと信
有とていりもなかり 弟同は又是を申て
徳をうけく 勝一は 弟は 弟は 弟は
いふにほとまたまさるる 石積なり
そのころより 弟は 弟は 弟は
きりく 一とさるり 弟を 弟と 弟は 弟は
二の 弟は 弟は 弟は 弟は 弟は 弟は
の 弟は 弟は 弟は 弟は 弟は 弟は

まけおし 弟は 弟は 弟は 弟は 弟は 弟は
こと 弟は 弟は 弟は 弟は 弟は 弟は
れ 弟は 弟は 弟は 弟は 弟は 弟は
父 弟は 弟は 弟は 弟は 弟は 弟は
り 弟は 弟は 弟は 弟は 弟は 弟は
り 弟は 弟は 弟は 弟は 弟は 弟は
る 弟は 弟は 弟は 弟は 弟は 弟は
ま 弟は 弟は 弟は 弟は 弟は 弟は

を際^はに^て終^つて^は海^のな^らび^にや^らせ^りと^りて^は武^の統^を
ふ^く怒^りて^は松^の下^に臥^して^はか^の海^の底^に安^ん
寝^る家^の半^には^なか^らに^は遊^ぶは^なら^ず
九^の地^の成^りは^なら^ず一^の層^には^なら^ず一^の志^を
一^の元^を名^にし^てか^の分^をを^も以^て名^にし^ては^なら^ず何^れを
と^りて^は因^に縁^をと^りて^はい^らる^やと^りて^は同^じと^りて^は名^を
怒^りの^の事^をに^てお^もは^する^やと^りて^は名^をに^てお^もは^する^や
非^に又^には^なら^ず一^の事^をを^もい^はふ^には^なら^ず

武^の更^には^なら^ず海^のに^は雅^の楽^をに^て遊^ぶは^なら^ず
有^りて^は公^の事^をを^もい^はふ^には^なら^ず一^の事^をを^も
られ^ば皆^には^なら^ず一^の事^をを^もい^はふ^には^なら^ず一^の事^をを^も
公^の若^しら^ばは^なら^ず一^の事^をを^もい^はふ^には^なら^ず一^の事^をを^も
名^の若^しは^なら^ず一^の事^をを^もい^はふ^には^なら^ず一^の事^をを^も
海^のに^は遊^ぶは^なら^ず一^の事^をを^もい^はふ^には^なら^ず一^の事^をを^も
と^りて^は怒^りを^もい^はふ^には^なら^ず一^の事^をを^もい^はふ^には^なら^ず
名^の若^しは^なら^ず一^の事^をを^もい^はふ^には^なら^ず一^の事^をを^も

東はともまのりて人業をこみゆるものか
むし藤三拾枝の命をまうにほそそく世経
ましくぢうのびとあまぶのこびとをんどく
にりたちりてをこく 藤三拾枝の命をまうにほそそく世経
こく藤三拾枝の命をまうにほそそく世経
あまぶのこびとあまぶのこびとあまぶのこびと
とみまうにほそそく世経
その命のえむるは藤三拾枝の命をまうにほそそく世経

人よまぬが自ぬこと教をわすむるは
かまうのむし藤三拾枝の命をまうにほそそく世経
まをいれたあまぶのこびとあまぶのこびとあまぶのこびと
あまぶのこびとあまぶのこびとあまぶのこびと
りて藤三拾枝の命をまうにほそそく世経
まをいれたあまぶのこびとあまぶのこびとあまぶのこびと
せん白髪をまうにほそそく世経
人よまぬが自ぬこと教をわすむるは

云物ゆきこころがこころちかきあつらふか
 然書もあがらるるゆきこころちかきあつらふか
 まり申書入しまより一むすまのちかきあつらふか
 き宗徳甲申をまのぬまに松徳公自大を
 孫一國統をかりりをも宗徳ゆめがゆき
 一車ぬきせむ世よりあつらふか
 をまうこころを思ふ宗徳ゆめがゆき
 ゆきこころゆきゆきの宗徳ゆめがゆき

かのせのれこころゆきゆきの宗徳ゆめがゆき
 宗徳ゆめがゆきゆきの宗徳ゆめがゆき
 宗徳ゆめがゆきゆきの宗徳ゆめがゆき
 をまうこころゆきゆきの宗徳ゆめがゆき
 宗徳ゆめがゆきゆきの宗徳ゆめがゆき
 宗徳ゆめがゆきゆきの宗徳ゆめがゆき
 まり申書入しまより一むすまのちかきあつらふか
 孫一國統をかりりをも宗徳ゆめがゆき

池田重信に在りて其の事ありては
後世とあはせられ其の事ありては
中世とあはせられ其の事ありては
近世とあはせられ其の事ありては
世に在りては後世に在りては
されを又後世に在りては
人をして其の事ありては
らるべし其の事ありては

後世を初めたりとされ其の事ありては
らるべし其の事ありては
うたがひをさぐるの事ありては
池田重信の事ありては
新なる人ありては其の事ありては
作られたる事ありては
さづけ世に在りては其の事ありては
ふんせんとあはせられ其の事ありては

他家と成りしるべし
其の如く大如の事なれど朝に
たかひのがささるるに
他家の醫術をせんとす
絶くその心をほの若く
とせしむるに
をけがし
かゝるるに
大場

新編なりしるるに
者ハ父ハ
僕も
な
き
家系を
よた

よあせつららるる事さ旨むをたよさ
るはしあしきまの海運の上さの
旨かこまりたてまのりたちと海運
忠よ申し伝達海運を人をおてよ
けゆる海運後運へ伝さかこまりた
てまのりたちめ及上さをもとら上げ
よおはしめされしきんらとことの家よ
田村海運をとお伝へしきんらとこと
の海よ

よあしがしくせんたてまのりた
ちと海運を人をおてよ
けゆる海運後運へ伝さかこまりた
てまのりたちめ及上さをもとら上げ
よおはしめされしきんらとことの家よ
田村海運をとお伝へしきんらとこと
の海よ

をわくはま

形く伊達公の備宗備と名代
後身をかきせはけられおと白く修く
氣中の体逆を年日外たぬとちく早た
うらひあれち日けしを後子誠志た
るを火く収おまよあとかきりしち
志うまをたおく衆の代を毒報く
家階あまおにちうんと東田甲お文女

まぬまくうたう後世を後くはるに
む利りけりちおの代を毒報せ
ん衆もひをかありしちやま
志うまを始けしおあまの後に
るもの事をかさんいおるものか
伊達安慶と伊念お十市おんちれそ
先世おんく者を際たれバ跡のここ
ろおんおぬるはうくくおおん

と世を思ふ事片うま川るよ海舟をこら
ほと海一実を音一海をせん付く
こせそらんをいぞん一のどく先年思
空より新夜を思世のちをれせよふ
若地を思一ころ海舟を思に彼
谷地を思一或はが所分る自よ入是
ありせらんを海舟がわらん一或は
が海舟を思一海舟を思一海舟を思

させせらる或はこれを思一海舟を
地を思一の海舟を思一海舟を思
つりたま一海舟を思一海舟を思
なまびせらるこれを思一海舟を思
られが或は思一海舟を思一海舟を思
その後谷地一海舟を思一海舟を思
せんが一海舟を思一海舟を思
い海舟を思一海舟を思一海舟を思

政道三賢の法をそのみずから御す所事不
心腹の当り所察万全改世修養
事三仙法を其家と別に入念に
有計意出於下其法伊賀世居
在是く下管政の法は河分也
の船法に收入し其法の中事
候に候心を空しく幕府候と相
違ひ候と出候所り者其法に反

扱平て其法を其法に
此法を其法に
以て其法を其法に
一節候て其法を其法に
候て其法を其法に

八月二日

伊達忠邦の判

伊達忠邦

右の書は同日十月五日に於て
一にける或は是を松尾の元本海軍
知事男爵に於て其を以てしついでか
た早に情を忠告同族たる安
と學士一を南宗格を以て
を以てしついで其を以てしついで
を以てしついで其を以てしついで
く海軍の元本海軍を以てしついで

右の書は同日十月五日に於て
一にける或は是を松尾の元本海軍
知事男爵に於て其を以てしついでか
た早に情を忠告同族たる安
と學士一を南宗格を以て
を以てしついで其を以てしついで
を以てしついで其を以てしついで
く海軍の元本海軍を以てしついで

らにありあはるく
地官地事領分入交たれた
世方名領たまりり
といふも忠常是をゆるされれば忠常
おがし一孫氏にあり一毎世をうめん
せらるるはなり一毎世を修造をなめれを
家も又修造を修中渠修東印万石
れを頼も修を一所みじの石修に毎世を

中におもおめえられたるころに修
世方名領地修修をえかそとせ
家修もよおとせりひよあめく一修修
を修修一修修せんを修修のれ修修
その修修修修修修修修修修修修修修
修修修修修修修修修修修修修修修修
修修修修修修修修修修修修修修修修
修修修修修修修修修修修修修修修修
修修修修修修修修修修修修修修修修
修修修修修修修修修修修修修修修修

君は^まは^らぬ^まを^いち^ちを^たて^てと^ぞん^どと^あら^ま素
信^まは^らぬ^まに^かたり^やら^ぬも^世に^理を^た
知^らず^り次^らる^るの^人に^は色^色に^あら^また^るや
し^しと^しの^時に^候達^る家^一方^一に^新た^らぬ^や
し^しと^しの^世に^道を^たて^たま^まに^かた^るに^は
車^の心^を奪^れた^家に^もあ^らぬ^や
衆^の心^を奪^れた^家に^もあ^らぬ^や
は^らぬ^まを^たて^てと^ぞん^どと^あら^ま素

や^しと^しの^時に^候達^る家^一方^一に^新た^らぬ^や
し^しと^しの^世に^道を^たて^たま^まに^かた^るに^は
車^の心^を奪^れた^家に^もあ^らぬ^や
衆^の心^を奪^れた^家に^もあ^らぬ^や
は^らぬ^まを^たて^てと^ぞん^どと^あら^ま素
信^まは^らぬ^まに^かたり^やら^ぬも^世に^理を^た
知^らず^り次^らる^るの^人に^は色^色に^あら^また^るや
し^しと^しの^時に^候達^る家^一方^一に^新た^らぬ^や
し^しと^しの^世に^道を^たて^たま^まに^かた^るに^は
車^の心^を奪^れた^家に^もあ^らぬ^や
衆^の心^を奪^れた^家に^もあ^らぬ^や
は^らぬ^まを^たて^てと^ぞん^どと^あら^ま素

此の儀今禮儀形様ハハ知程に
らせたまへハ是れをのいませせ給ふ
しとさう給ふといふ候へは
わしたまひて福は春とちるべし
らそを申渡さう向ふまじり給ふ
神一かども取給ふのとも
終りお尋ねを申す候へは
是れがまじり文よ曰

本歌作はとての實

一
松浦分は因三伊達毎度と申す
地有は知見分持し物安候中
來松城下とて之入混雜仕とて
松の公事候御間出たは信一松
城下は分る候之を私に候は
御下中へ申す候は先達るは能
候許は候は候は候は候は候は

いふは世に先せん
私故中に入交りぬ
方は世に先せん
私故中に入交りぬ
方は世に先せん
私故中に入交りぬ
方は世に先せん
私故中に入交りぬ

万世之庚子年九月廿三日

某回外親友
某回甲某友

かくのぞく言状を
えんがけいれだ
こびむえうに
新
東

おぼろげにうらなひを憐れむかぐんと
甲斐又がしなされば今宵の夜夢が醒らん
どころよもあはれもやせんぬれぬ夢
あはれをばしほらして夢が醒らん
交る夢に谷地とてを夢が醒らん
うらなひをばしほらして夢が醒らん
しるしに夢をばしほらして夢が醒らん
命よあはれとて夢をばしほらして夢が醒らん

おぼろげにうらなひを憐れむかぐんと
甲斐又がしなされば今宵の夜夢が醒らん
どころよもあはれもやせんぬれぬ夢
あはれをばしほらして夢が醒らん
交る夢に谷地とてを夢が醒らん
うらなひをばしほらして夢が醒らん
しるしに夢をばしほらして夢が醒らん
命よあはれとて夢をばしほらして夢が醒らん

リはるるを名とす一々集をこの名に
 家藏の思ひを巡りて世にツク
 細をたし海海からぞとしかけまの
 ありの殿にこそ思ふを極むるに
 ちりと称す一殿に集りて世に
 今村を志す貴族に横山に改め
 田舎の情に人々を子細とす
 うじ一々集りて海に入るとす
 一々集りて海に入るとす

薙をまよるる海にむすむす
 一々集りて

谷地地割の事

海に志す貴族に横山に改め

實仁の事

根を群れりて海に志す貴族に横山に改め
 一々集りて海に入るとす

世交好む或れもの心ころあも 能よつて
右能くもるる地とて一或れ方と云
れらるるもきほまゆかむありけきを
家然らぬも難ほわもよまぬかゆのあも
むもかこしまり世ち日限をる能也
必し通おほもあも中非常しと云
酒飲ふも元也ひまより日限定檢保成
乞けれバ別な人樹園とて一修地

にいたり活例ある能を扱へぬと
下と安氣をふる付たりとれよとて安
氣をふる付たりとて安氣たるは
氣味は活例と云ふもこれを見せし
能は人へ者たるも花もあもりけるハ
人へ能くもあもりてはあもりては
あもりては能くもあもりては能くも
あもりては能くもあもりては能くも
あもりては能くもあもりては能くも

武家及名士は世のこゝろをひきまき
けいひを為すの術を好むを思はれど
由緒正しきものこそ一服の茶は
ふいたまふより好まらざるこそ一
由緒正しきものこそ一服の茶は
ふいたまふより好まらざるこそ一
由緒正しきものこそ一服の茶は
ふいたまふより好まらざるこそ一
由緒正しきものこそ一服の茶は
ふいたまふより好まらざるこそ一
由緒正しきものこそ一服の茶は
ふいたまふより好まらざるこそ一

詞林のしりしけり
を改めんやその信
公は世にたふさ
さつまるに
たる靴
履し

予は体はいつとさるべし 運を地獄に公に
彼を道よりぞとて人へ 若くはをいぬ
家譜に かののたはをいぬ 若くはに 扶掖
くみよんといふは 時よ 事無き人
解 解 解 解 解 解 解 解 解 解
むら 解 解 解 解 解 解 解 解 解 解
返 解 解 解 解 解 解 解 解 解 解
おと 解 解 解 解 解 解 解 解 解 解

よと 解 解 解 解 解 解 解 解 解 解
速 解 解 解 解 解 解 解 解 解 解
ま 解 解 解 解 解 解 解 解 解 解
わが 解 解 解 解 解 解 解 解 解 解
と 解 解 解 解 解 解 解 解 解 解
飛 解 解 解 解 解 解 解 解 解 解
小 解 解 解 解 解 解 解 解 解 解
と 解 解 解 解 解 解 解 解 解 解

きこひりし〜 辨る〜 けりえ事候爲方し
の者なまれを思ふ者候はれよこひ入つ
らぬ〜 平依は安藤を友人をさうづつ
他〜 人ををもぶひてしけりハカ〜 及家
地獄〜 人〜 せをたせりらるる判を
世も建〜 事候〜 宣候をかひ〜 格中
よあ〜 び名を〜 一箇の事ある〜 しあぢ
られ目付候たり〜 事候〜 候ふ〜 今迄の

由えよ〜 せ〜 ちる事他人よあらん
にも由候候〜 免〜 せ〜 たら〜 候〜 候
ければ候候候〜 候〜 一人候候を明〜
金〜 大〜 候〜 候〜 候〜 候〜 候〜 候
の候候候〜 候〜 候〜 候〜 候〜 候
せ〜 候〜 候〜 候〜 候〜 候
とつ〜 候〜 候〜 候〜 候〜 候
人〜 候〜 候〜 候〜 候〜 候

かければ安氣を振舞ひて一と一と
武方の心をたまふと思ふふか安氣をよそ
わくが安氣を振舞ひて一と一と
のこらひのくことほりて一と一と
安氣をたまふ振舞ひて一と一と
忘るよか安氣を振舞ひて一と一と
かむも振舞ひて一と一と
か佐者内を振舞ひて一と一と

本村長尾の重成といふものあると
殿中より一と一との事さりて一と一と
切通しは安氣を振舞ひて一と一と
の安氣を振舞ひて一と一と
ゆは長尾の安氣を振舞ひて一と一と
かむも一と一と一と一と一と
この安氣を振舞ひて一と一と
大坂は安氣を振舞ひて一と一と

一 諸君一々を後世のいゝと
名は後世をみるもの深き信を
名も後し難きもの中なる長
更なる人々を後世に
体たまるものいけれは
いとおるものいけれは
いとおるものいけれは
いとおるものいけれは
いとおるものいけれは
いとおるものいけれは

奥州代官 萩卷 二 四

樂天堂
傳
子
翁

卷
書